

# 大学生の運動遊びの指導に対する認識と 保育者養成の課題

青木 通\*・浪越 一喜\*\*・中尾 健一郎\*\*\*・石井 十郎\*\*\*\*

保育者に求められる運動遊びの計画力や実践力を向上させるため、保育者を志す大学生が運動遊びの指導に対してどのような認識をもっているのかについて分析し、保育者養成の課題を検討することを目的とした。質問紙調査を行い、4年制大学、短期大学の計3大学に在籍する387名を分析対象とした。調査内容はこれまでの運動とのかかわりを9項目設定し、6段階等間隔尺度で測定した。その合計得点を運動関与度の総体指標とし、得点の高低から2群に分類した。従属変数は、運動遊びの指導に対する認識として13項目、運動技能の自己評価として11項目を設定し、6段階等間隔尺度を用いた。結果として、運動関与度の低い群は、運動遊びの指導に対する認識、運動技能の自己評価が低い傾向にあった。養成上の課題として、自発的に学ぶ姿勢を意図することが重要であり、運動遊びの工夫・改善や創造する機会とその実践の場の確保があげられた。そこでは、子どもがより楽しいと感じるためにはどうすればいいのかということを中心に考えながら実践を繰り返す過程を重視する必要がある。

Key words : 大学生, 運動遊び指導, 認識, 保育者養成

## I. 緒言

スポーツ庁(2018)によれば、児童生徒の体力・運動能力の状況として、小学校5年生、中学校2年生ともに男子は平成20年度以降から横ばい傾向、女子は向上傾向にあることが報告されている。しかしながら、昭和60年度との比較では、一部のテスト項目を除き児童生徒の半数以上が平均値を下回っているとされている。文部科学省(2012a)の「第1期スポーツ基本計画」では、昭和60年ごろの体力水準を上回ることが施策とされていることから、この年代が体力水準のピークだったとすれば、現状の水準は回復途上にあるといえる。

一方で、スポーツ庁(2017)によれば、幼児期に外遊びをしていた児童は日常的に運動し、体力も高いと報告している。したがって、幼児期に運動遊びに対する積極的な態度を育むことは、その後の運動習慣の獲得に大きな影響を及ぼすと考えられる。また、文部科学省(2012b)は、「幼児期運動指針」を通知し、幼児が多様な運動を経験できる機会、自発的に体を動かして遊ぶ機会を保障することの重要性を指摘している。このためには、保育者側の環境構成の工夫、発育発達段階の理解、発達に対する見通し、安全に対する配慮、家庭や地域との連携に留意しながら適切な運動遊びを提供していく必要がある。

\* 人間学部人間福祉学科

\*\* 帝京大学教育学部初等教育学科

\*\*\* 長崎短期大学保育科

\*\*\*\* 東海大学経営学部経営学科

このようななか、平成29年3月に「幼稚園教育要領」（文部科学省、2018）、「保育所保育指針」（厚生労働省、2018）、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2018）がそれぞれ改訂告示された。いずれも、育みたい資質や能力として、「知識及び技能の発達」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3点が明示され、一体的に育むことを求めている。さらに、小学校就学時の具体的な姿として10項目が示され、保育者が指導する際に考慮する内容として整理されていることが特徴といえる。領域「健康」においては、「健康な心と体」が中心となるが、「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」等の項目についても運動遊びを通して育むことは可能であり、保育内容領域を超えた総合的な指導が重要といえる。また、育みたい姿が明確化されたことで、日々の教育・保育活動は計画力や実践力が問われることになり、保育者養成校においては運動遊びにかかわる科目や教授内容の整理、指導方法、学習形態を検討する必要性が生じている。

保育者志望学生の運動に対する認識については、高德（2017）が運動意識の構造として、運動自己肯定感、運動願望、周囲からの応援の3因子を抽出し、運動自己肯定感の低さが運動に対する苦手意識と関連していることを指摘している。そして、木原・松田（2002）は、大学生の小学校教育実習を事例として体育科指導における心配に関して指導経験の有無から分析し、模範を示す、必要な運動技能を指導するといった不安は授業計画を含めた指導経験のある群が減少し、安全に対する配慮や施設管理については指導経験のある群の不安が増大したと報告している。さらに、丸井・井邑（2015）によれば、女子短期大学の運動遊びを実践する授業において、グループ学習を採用することによって、運動有能感や指導に対する不安が軽減されたとしている。一連の先行研究からは、保育者を志す大学生の運動に対する認識は、知識

や技能に関する自己肯定感が低く、これが指導の場面において不安を生じさせていると推測され、運動経験、運動自己肯定感、運動指導それぞれの関係性の強さをうかがうことができる。しかしながら、模擬的な指導体験や指導に関するグループ学習などによって不安が解消されることも示されており、大学生の運動に対する自己肯定感に配慮しながら、運動遊びの実践力、展開力を高めることを意図した授業作りをしていく必要があるといえる。

本研究においては、今後保育者に求められる運動遊びの計画力や実践力を向上させるための方策を保育者養成に課せられる役割の観点から明確化し、保育者を志す大学生が運動遊びの指導に対してどのような認識をもっているのかについて知見を得ることを目的とした。具体的には、大学生のこれまでの運動への関わりや程度に着目し、運動遊び指導に対する認識、運動技能に対する自己評価の差異を検討した。

## II. 方法

### 1. 調査対象

幼稚園教諭及び保育士の資格取得が可能な4年制大学、短期大学の計3大学に在籍する保育者希望の学生434名を対象として質問紙調査を行った。集合調査法を用い、未回答等の不備のある回答を除いた387名を有効回答として分析の対象とした。調査時期は2017年10月であった。調査にあたっては、目的、個人情報保護や倫理面での配慮について説明を加え、同意が得られた場合のみ回収した。

### 2. 調査内容

これまでの運動経験を問う項目として、小学校、中学校、高等学校での体育授業に対する好意度、中学校、高等学校、大学での運動部経験の程度、運動やスポーツ実施の好意度、スポーツをみることの好意度の9項目を設定した。

運動遊びの指導に対する認識項目は、「幼児に運動遊びを企画・提案することは難しいと思う」「幼児に運動遊びの指導はしたくないと思う」「幼

児は自由に運動遊びをしていけばよいと思う」などの13項目を設定した。運動技能の自己評価項目は、「現段階で『鬼ごっこ』を幼児に3種類以上提案できる」「今、ドッチボールを幼児に提案できると思う」「曲に合わせてダンス・体操を創ったりすることができる」などの11項目を設定した。なお、これらの項目は、学生とのフリーディスカッションから得られた内容を参考にして独自に構成した。なお、いずれの調査項目も「6：かなりあてはまる」から「1：全くあてはまらない」の6段階等間隔尺度を用いた。

### 3. 分析方法

すべての調査項目に対して記述統計量および度数分布を算出し、データの特徴を確認した。これまでの運動経験を問う9項目は合計得点を算出し運動関与度の指標とした。また、その平均値を基準に高運動関与群と低運動関与群の2群に分け、独立変数とした。そして、運動遊びの指導に対する認識項目、運動技能の自己評価項目については、項目ごとに平均値及び標準偏差を算出し、運動関与度の2群間での平均値の差を検討するために対応のないt検定を用いた。一連の統計処理にはパソコン用統計ソフト IBM SPSS Statistics 19 (日本IBM社) を使用し、統計的な有意水準を5%未満とした。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 運動遊びの指導に対する認識

対象者387名の大学種別の内訳は、4年制大学210名(54.3%)、短期大学177名(45.7%)であった。男女比は男子学生41名(10.6%)、女子学生346名(89.4%)であった。学年構成は1年生150名(38.8%)、2年生157名(40.6%)、3年生80名(20.7%)であった。表1には、対象者の属性として男女別に集計した大学種別と学年構成の内訳を示した。男子学生は4年制大学に所属している割合が高く(75.6%)、学年構成は男女とも3年生の占める割合が低かった(男子：24.4%、女子：20.2%)。

表1. 対象者の属性 (N=387)

		男子学生 (N=41)		女子学生 (N=346)	
		n	%	n	%
【種別】	4年制大学	31	75.6	179	51.7
	短期大学	10	24.4	167	48.3
【学年】	1年生	13	31.7	137	39.6
	2年生	18	43.9	139	40.2
	3年生	10	24.4	70	20.2

表2には、運動遊びの指導に対する認識について、項目ごとに平均値と標準偏差を示した。「全体(例：クラス集団)を動かすことに不安を感じる」(4.09±1.30点)、「運動遊びの指導といっても何を指導したらよいかわからない」(3.92 ± 1.17点)、「幼児に運動遊びを企画・提案することは難しいと思う」(3.91 ± 1.25点)、「運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる」(3.58 ± 1.21点)の4項目が上位項目としてあげられた。クラス運営、指導内容、指導計画、指導方法といった運動遊びの直接的な指導にかかわる内容について不安を抱えている傾向が示唆された。一方、下位項目として「幼児に運動遊びの指導はしたくないと思う」(2.25 ± 1.10点)、「運動遊びの指導は、外部の指導者に任せればよいと思う」(2.32 ± 0.97点)、「幼児と一緒に運動遊びに興じることは苦痛である」(1.55 ± 0.81点)、「幼児と一緒に運動遊びに興じる必要性はないと思う」(1.55 ± 0.87点)の4項目があげられた。いずれも指導における子どもとの関係性を意味する項目と考えられ、運動遊びの間接的な指導といえる。これらは否定的な得点傾向を示していることから、運動遊びの指導においては保育者が存在することの重要性が認識されていると解釈された。

以上の結果からは、運動遊びの必要性は認識されているものの指導の具体的な内容や方法について困難さを有している状況にあることが推察され、運動遊びの実践力不足が示唆された。

表3には、運動遊びの指導に対する認識について、運動関与度の差異によって各項目の平均値を比較した結果を示した。運動関与度については、過去から現在までの運動との関わりを意味する9項目の合計得点を算出し、38.51 ± 11.46点と

表 2. 運動遊びの指導に対する認識（項目別全体平均値）

認識項目	全体 (N=387)	
	Mean	SD
幼児に運動遊びを企画・提案することは難しいと思う	3.91	1.25
幼児に運動遊びの指導はしたくないと思う	2.25	1.10
幼児は自由に運動遊びをしていけばよいと思う	3.31	1.16
運動会の企画（プログラム）は、既存の内容に従えばよいと思う	2.86	0.94
運動会の企画（プログラム）を考えることは避けたい	2.77	1.14
運動遊びの指導は、外部の指導者に任せればよいと思う	2.32	0.97
幼児と一緒に運動遊びに興じることは苦痛である	1.55	0.81
幼児と一緒に運動遊びに興じる必要はないと思う	1.55	0.87
運動遊びの指導といっても何を指導したらよいかわからない	3.92	1.17
全体（例：クラス集団）を動かすことに不安を感じる	4.09	1.30
幼児が運動遊びを思い切り楽しむより、ケガや事故の方が心配である	3.34	1.11
運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる	3.58	1.21
保育者（資格・免許取得）のための最低限の学修で十分だと思う	2.63	1.24

いう値が得られた。この値を基準として、39点以上の得点を示したグループを高運動関与群、38点以下の得点を示したグループを低運動関与群として分析を行った。

13項目のうち「幼児が運動遊びを思い切り楽しむより、ケガや事故の方が心配である」「保育者（資格・免許取得）のための最低限の学修で十分だと思う」を除く11項目で、低運動関与群が高い得点を示した。平均値の差異を検定したところ、「幼児に運動遊びの指導はしたくないと思う」(t=-4.44, p=.00), 「幼児と一緒に運動遊びに興じることは苦痛である」(t=-4.14, p=.00), 「運動遊びの指導は、外部の指導者に任せればよいと

思う」(t=-3.14, p=.00), 「幼児に運動遊びを企画・提案することは難しいと思う」(t=-2.94, p=.00), 「全体（例：クラス集団）を動かすことに不安を感じる」(t=-2.72, p=.01), 「運動遊びの指導といっても何を指導したよいかわからない」(t=-2.39, p=.02), 「運動会の企画（プログラム）は、既存の内容に従えばよいと思う」(t=-2.20, p=.03), 「運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる」(t=-2.08, p=.04) の8項目で有意差が認められた。運動の関与が少ない群ほど運動遊びの企画、指導内容、指導方法、指導関与等に否定的な認識をもっていることが明らかとなり、運動遊びの指導実践に対する不安が大きい傾向にあることが示

表 3. 運動関与度と運動遊びの指導に対する認識

認識項目	高運動関与群 (N=215)		低運動関与群 (N=172)		t	p
	M	SD	M	SD		
	幼児に運動遊びを企画・提案することは難しいと思う	3.75	1.28	4.12		
幼児に運動遊びの指導はしたくないと思う	2.03	0.99	2.53	1.17	-4.44*	.00
幼児は自由に運動遊びをしていけばよいと思う	3.25	1.20	3.39	1.11	-1.20	.23
運動会の企画（プログラム）は、既存の内容に従えばよいと思う	2.77	0.90	2.98	0.97	-2.20*	.03
運動会の企画（プログラム）を考えることは避けたい	2.67	1.11	2.89	1.16	-1.90	.06
運動遊びの指導は、外部の指導者に任せればよいと思う	2.19	0.94	2.49	0.98	-3.14*	.00
幼児と一緒に運動遊びに興じることは苦痛である	1.40	0.75	1.74	0.86	-4.14*	.00
幼児と一緒に運動遊びに興じる必要はないと思う	1.52	0.95	1.58	0.76	-0.63	.53
運動遊びの指導といっても何を指導したらよいかわからない	3.79	1.19	4.08	1.14	-2.39*	.02
全体（例：クラス集団）を動かすことに不安を感じる	3.93	1.33	4.28	1.24	-2.72*	.01
幼児が運動遊びを思い切り楽しむより、ケガや事故の方が心配である	3.35	1.15	3.33	1.07	0.15	.88
運動遊びの際の補助や声掛けのし方に不安を感じる	3.47	1.25	3.73	1.16	-2.08*	.04
保育者（資格・免許取得）のための最低限の学修で十分だと思う	2.67	1.36	2.58	1.09	0.80	.43

注 1) M：平均値 SD：標準偏差 \*：p<.05(両側検定)

唆された。

## 2. 運動技能の自己評価

運動技能の自己評価に関する 11 項目について、それぞれの平均値および標準偏差を表 4 に示した。2.97 ± 1.44 点から 5.02 ± 1.26 点の範囲で得点を示し、「現段階で『鬼ごっこ』を幼児に 3 種類以上提案できる」(5.02 ± 1.26 点) が高い得点を示した項目としてあげられた。これ以外では、「幼児の手本となるような跳び縄を跳ぶことができる」(4.58 ± 1.37 点)、「幼児の手本となるようなボールを投げることができる」(4.32 ± 1.42 点)、「幼児の手本となるような前転(マット)ができる」(4.23 ± 1.51 点)、「幼児の手本となるように走ることができる」(4.19 ± 1.45 点)、「幼児の手本となるようにボールを蹴ることができる」(4.06 ± 1.47) があげられ、鬼遊びといった運動遊びを代表する種目、跳び縄、ボール、マット、走運動などの技能評価が高い傾向にあった。これらは、養成段階において運動遊びの中心的な内容として取り扱うため、運動実践をする機会が多いことが影響していると考えられる。一方で、「運動遊びについて自主的に学んだり考えたりすることがある」(2.97 ± 1.44 点) は最も低い値を示し、否定的な反応が認められた。種目にかかわる技能的な評価が高い傾向にあることを考慮すれば、この項目の得点の低さは既存あるいは一般的な指導方法のみの学修で完結し、それ以上の探求は行っていない可能性があるといえる。

表 5 には、運動技能の自己評価項目について運動関与度の差異で平均値を比較した結果を示した。すべての項目で高運動関与群が高い得点を示し、「幼児の手本となるように走ることができる」(t=9.00, p=.00)、「幼児の手本となるようなボールを投げることができる」(t=8.87, p=.00)、「幼児の手本となるような開脚跳び(跳び箱)ができる」(t=8.58, p=.00)、「幼児の手本となるような逆上がり(鉄棒)ができる」(t=8.37, p=.00)、「幼児の手本となるような前転(マット)ができる」(t=8.04, p=.00)、「幼児の手本となるようにボールを蹴ることができる」(t=7.09, p=.00)、「幼児の手本となるような跳び縄を跳ぶことができる」(t=6.55, p=.00)、「運動遊びについて自主的に学んだり考えたりすることがある」(t=6.49, p=.00)、「曲に合わせてダンス・体操を創ったりすることができる」(t=2.40, p=.02)、「今、ドッチボールを幼児に提案できると思う」(t=2.18, p=.03) の 10 項目で有意差が認められた。特に、平均値では鬼遊び、跳び縄、ボール、マット、走運動、跳び箱などの運動遊びの基本的、中心的な種目で高い得点を示す傾向にあり、学生の運動とのかかわりの高さが運動技能に対する自己評価に影響していることを確認した。また、「運動遊びについて自主的に学んだり考えたりすることがある」の有意差検定からは、学ぶ意欲、姿勢といった心理的な側面についても促進することが推察され、学生の運動機会を確保することの重要性を意味しているといえる。

表 4. 運動技能の自己評価 (項目別全体平均値)

自己評価項目	全体 (N=387)	
	Mean	SD
現段階で「鬼ごっこ」を幼児に 3 種類以上提案できる	5.02	1.26
今、ドッチボールを幼児に提案できると思う	3.93	1.28
曲に合わせてダンス・体操を創ったりすることができる	3.41	1.42
幼児の手本となるような開脚跳び(跳び箱)ができる	3.95	1.61
幼児の手本となるような前転(マット)ができる	4.23	1.51
幼児の手本となるような逆上がり(鉄棒)ができる	3.45	1.84
幼児の手本となるような跳び縄を跳ぶことができる	4.58	1.37
幼児の手本となるようなボールを投げることができる	4.32	1.42
幼児の手本となるように走ることができる	4.19	1.45
幼児の手本となるようにボールを蹴ることができる	4.06	1.47
運動遊びについて自主的に学んだり考えたりすることがある	2.97	1.44

表 5. 運動関与度と運動技能の自己評価

自己評価項目	高運動関与群 (N=215)		低運動関与群 (N=172)		t	p
	M	SD	M	SD		
現段階で「鬼ごっこ」を幼児に3種類以上提案できる	5.12	1.21	4.88	1.31	1.89	.06
今、ドッチボールを幼児に提案できると思う	4.06	1.38	3.78	1.12	2.18*	.03
曲に合わせてダンス・体操を創ったりすることができる	3.57	1.43	3.22	1.38	2.40*	.02
幼児の手本となるような開脚跳び（跳び箱）ができる	4.53	1.44	3.23	1.53	8.58*	.00
幼児の手本となるような前転（マット）ができる	4.74	1.36	3.59	1.44	8.04*	.00
幼児の手本となるような逆上がり（鉄棒）ができる	4.09	1.72	2.65	1.65	8.37*	.00
幼児の手本となるような跳び縄を跳ぶことができる	4.98	1.19	4.09	1.42	6.55*	.00
幼児の手本となるようなボールを投げるができる	4.85	1.16	3.65	1.44	8.87*	.00
幼児の手本となるように走るができる	4.73	1.27	3.51	1.37	9.00*	.00
幼児の手本となるようにボールを蹴ることができる	4.51	1.40	3.51	1.35	7.09*	.01
運動遊びについて自主的に学んだり考えたりすることがある	3.37	1.46	2.47	1.26	6.49*	.00

注1) M：平均値 SD：標準偏差 \*：p<.05(両側検定)

#### IV. 総括

本研究においては、育みたい能力や資質が明確化された保育所保育指針等の改定にともない、保育者に求められる新たな役割の観点から、運動遊びの計画力や実践力を高めるための方策を保育者養成の課題として検討を加えた。保育者を志す学生のこれまでの運動への関与の程度に着目して、運動遊びの指導に対する認識と運動技能に対する自己評価について分析したところ、運動関与が低い群ほど運動遊びの指導や運動技能に対する自己評価、自発的に学ぶ姿勢に低い認識をもっていることが明らかとなった。

養成上の課題として、自発的に学ぶ姿勢を意図することが重要であり、既存の運動遊びの工夫・改善、新たな運動遊びを創造する機会とその実践の場の確保が必要である。例えば、実践の場の確保という点では、提携・連携している協力園が存在していると考えられるが、単なるプログラム提供やボランティア活動に終わらせることなく、子どもがより楽しいと感じるためにはどうすればいいのかということを常に考えながら実践を繰り返す過程を重視する必要がある。また、授業場面では、グループ学習やアクティブ・ラーニングなどの学習形態を工夫する必要があるといえる。

今後の研究課題としては、運動遊びの指導における不安や困難さに影響を与えている要因について詳細な検討を加えること、保育活動における指

導場面での保育内容領域間の関連性を明らかにすることがあげられる。

#### 参考文献

青木 通・浪越一喜 (2011a). 大学生の保育者資質に関する意識変容の検討, 日本保育学会第 64 回大会予稿集, p.507.

青木 通・浪越一喜 (2011b). 大学生の保育者資質に関する意識変容の検討 (2), 全国保育士養成協議会第 50 回研究大会研究発表論文集, pp.256-257.

木原成一郎・松田泰定 (2002). 教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究, 学校教育実践学研究, 8 : 1-5.

厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説平成 30 年 3 月, フレーベル館.

丸井一誠・井邑智哉 (2015). 女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果—運動有能感と心配に着目して—, 金沢青陵大学人間科学研究, 9(1) : 31-34.

ミネルヴァ書房編集部 (2018). 保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領改正とポイント, ミネルヴァ書房.

文部科学省 (2012a). スポーツ基本計画, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/plan/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/index.htm) (参照日 2018 年 9 月 23 日)

文部科学省 (2012b). 幼児期運動指針について, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/)

- undousisin/1319192.htm(参照日 2018 年 9 月 23 日)
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説平成 30 年 3 月, フレーベル館.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説平成 30 年 3 月, フレーベル館.
- 日本発育発達学会 (2014). 幼児期運動指針実践ガイド, 杏林書院.
- 杉原 隆・川邊貴子 (2014). 幼児期における運動発達と運動遊びの指導, ミネルヴァ書房.
- スポーツ庁 (2017). 平成 28 年度体力・運動能力調査の結果について, [http://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/houdou/29/10/1396996.htm](http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/29/10/1396996.htm)(参照日 2018 年 9 月 23 日)
- スポーツ庁 (2018). 平成 29 年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果, [http://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/toukei/kodomo/zencyo/1401184.htm](http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1401184.htm)(参照日 2018 年 9 月 23 日)
- 高德 希 (2017). 幼児体育の授業が保育者志望学生の運動意識へ及ぼす影響, 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, 3: 213-220.
- 竹中晃二編 (2010). アクティブ・チャイルド 60min. -子どもの身体活動ガイドライン-, サンライフ企画.
- 田辺昌吾 (2011). 心身ともに健康な子どもを育てるための保育者の資質について—「健康」保育者効力感からの検討—, 四天王寺大学紀要, 51: 175-185.

(2018.9.26 受稿, 2018.11.6 受理)

